

— 深求・川にちなんだ万葉集の歌 —

まんよう かわごころ

# 万葉の川心 第4回

研究第二部 船田 園子

雄神川紅をかみがはにほふ少女せとめらし

葦附あしつき（水松の類）採ると瀬に立たすらし

（巻第十七 四〇二一番歌） 砺波郡の雄神川の辺にして作る歌一首

川に入ってみよう。

土手の上から眺めたときは、さらさらと眩しくて気後れがしたけれど、いま目の前に流れる水を見ていたら、無性に足をつけたくなった。

流れを遮るように向う岸に向かつて歩く。時には流れに逆らってみるのもいい。眠っていた少女の頃の好奇心が動き出した。誰も見ていないだろうなと思いつつながら、本当は特別な人にだけ見ていて欲しい気もする。万葉の少女たちの心に少し染まったようだ。

大伴家持は二十代後半、都を離れて越中守として富山に赴任した。大伴氏と藤原氏の政争のあおりを受けた左遷であると伝えられている。慣れない土地で知る人もなく、着任の頃に詠まれた歌の数は少ない。しかし、次々訪れる不幸に、歌が心の慰めになっていったと言えるだろう。家持はこの地で突然の弟の死に遭遇し、自らも大病に犯されて死の淵もさまよったのである。

時は春、ようやく健康を取り戻し任地を巡行する折、雄神川（今の庄川）のほとりに来たところ、乙女たちが葦付のりを探っている。一時とて都を忘れたことのない家持の心にも、いつの間にか越中国を愛する心が生まれだした。少女たちの衣は素朴で都の人のあてやかさはない。しかし、若さで紅を匂い立たせていた。紅、水の青、葦付の緑と、初夏の日差しを白を美しく取り混ぜたこの歌は、家持の都への思いを重ね合わせることで、

味わいが深まるように思う。葦付のりは、天然記念物に指定された清流のみ自生する特産物で、これを歌に詠みこむことが都にも地方の良さを伝えたいという想いにつながっているのではないだろうか。

雄神川は今の庄川にあたり、当時は小矢部川に合流し射水川となっていたが、土砂流出のために現在の川筋に移行した。富山県高岡市中田町上麻生にあるあしつき公園に、この歌の碑が建てられており、そこに葦付が保存されているという。

「雄神川に紅が映って美しい。少女たちが葦付を探ると、浅瀬に立っているようだ。」そこには家持の、国主として任地を愛する心が静かに流れている。



あしつき公園にある歌碑